

仇訖七部集

卷  
み  
の

三

中村俊定文庫  
文庫 18  
685  
3







をきくじ徳元五徳ハツクニ  
はらふをこゝろ通さるゝな  
こたり彼あり上人撰集抄ナリ代骨  
てんを作らるゝ神いれ  
多き笛を吹やうになん結  
とりされなる人よ成て結  
やう五の祥のう結さぬは  
及魂乃法代をうろくは結ふ

屋敷まゐりたより一為代入  
しアイウエシロくひき  
いふはく吟祥もあめ通  
一黒俳諧も魂代入し神  
ところとて我翁行脚乃る  
伊加越一黒山申もく  
後り小義を看せ俳諧  
乃神を入ぬすい々結をた



ちまた断腸のむしを呼  
 ぶ事神あるに懼る人ま幻  
 術なりこれをもえりて此  
 集をつらとて様そのい名  
 付しあきある是の序をそ  
 れらへり魂を合せし去来  
 凡兆乃ほりきりたるよきなり  
 書

三首其角原トナ



猿蓑集卷之一

一枚紙アリ

冬

数

初〜我猿を小蓑をほけ也 芭蕉  
 あきけきある夜は猿の 其角  
 時ふききあるは 千那  
 幾人〜我のぬき田代椿 僧 丈艸  
 猿持のねね〜 膳所 正秀  
 猿はやいり時ふきき 史邦



舟人のあはれききしつゝし 尚白

伊賀の境より

やうや素良の隣乃一時面 曾良

時ふや軍本つゝ屋窓あり 凡兆

ふりや竹田の里やけし我 乙羽

多すきれ一軍の光や小夜時面 羽紅

新田は稗穀屋し 昌房

いふや沖の河をけし帆片帆 去来

歌

しるおよけや北斗代星のあ 百歳

いふも動く地をきおねたれ 野水

浪より

しるはけとわしる船の中 其角

歸るけしけしる志ん延切し 同

禪もれ雲のふりやや神月 凡兆

百舌鳥 百舌鳥のあはれおしれ松より月 嵐蘭

こけしや頬腫痛む人の影 芭蕉



かゝけを延べたるのをよま 凡兆

たのしみ

揮毫のふりありぬる枯竹をれ 伊賀 土芳

流梯をたづめて通る十夜水 膳所 裾道

ちやのふれやけり人あきと女 伊賀 越人

ふりむけ茶のふゆふれをり 伊賀 猿錐

古ちけ貴子もあきりきり 伊賀 凡兆

公羽の堅田ふ軍旅をゆき

雑水のかゝりなりは冬ともり 其角

こころをさ牡丹のふれも裸 伊賀 車来

草津

あひまをりうきいのかくれ 尚白

神逆水のうきうき 珠碩

霜月朔旦

揺るるふく物あり 伊賀 良品

水を月けあをけり 羽後 不玉



今ハ世をふりてしきや冬の蟬 尾張 貝葉

尾野のころもいふは海風 去来

一夜くさむき海や釣千竿 伊賀 探丸

こころに多賀たき井のき 戸 尚白

茶湯のころもいふは海風 龜翁

炭竈より夏に枝の倒き 九兆

住つぬ様のころや火燵 芭蕉

寝ころや火燵浦園のころ 其角

山前れ小室もあうぬ冬 九兆

まゑやゆき 尾張 荻境

こころもいふは海風 伊賀 半残

貧交

まゑにけり 大州

浦風や巴をくす 曾良

あゝ儀や 去来

狼のあゝ 史邦



背門に乃入のほるちちれ 丈艸  
 いしき雪よまうきて鳴千那 千那  
 矢田のゆや浦のあつれは鳴ちち 凡兆  
 筏されんる跡や駕のち 本節  
 水底をうんてまゝ魚の小鴨か 文州  
 ちんるの寝入るめる余吾の海 路通  
 死んで探成らん鷹はんか 景蒙  
 襟をうり首引る冬れ月 秋風

ちあやや鎖のまれて冬れ月 其角  
 かちりれ浦園のちりやみの痕 長崎 暮年  
 見えん旅人ふり 石部山 智月  
 公羽の御れちちの食をあら 義濃  
 らる記あり略く  
 首出てうつちるんやけ食 竹戸

題竹戸之食

玉をわ我るまけあし紙食 曾良  
 魚のけ橋乃やるせがさ秋か 探丸



志のこゝに教珠のまのす綱袋 史邦

白砂を候す

膝つゝまのこまの居る霰の 史邦

校櫛のふれぬは狂ふあり 野童

鶺鴒乃鴉ふりこけず霰散る 伊賀 不峰

呼ふも射賣るゝぬあられ 凡兆

こころの渾るゝ朝飯のぬき 膳所 盡好

こころの肉は居るれ人へ 其角

初音よ響部屋のうゝ新朗 史邦

おれやげのふれ吹くやも 羽紅

つゝもふれぬねのこゝろ 探丸

下京やちつむとけん夜れる 凡兆

ちろくといふ一筋やちろの原 同

信濃路をさるゝ

ちろくや穂屋に居るれ 芭蕉

草庵の留るれ



妻老六の屋もあけと巻れど 其角  
高れ目八竹の子袋うはさりたる 尾張 羽立  
海よりも健あふふさねしん 長崎 卯七  
いりりてちや雪のうらさ 去来

青亜追悼

乳のこみに世を渡りも師老 尚白  
うゝ舞も元也の慶をされ内 芭蕉  
鈴の記憶ハ部は似ぬもの 乙卯

一月のあゝ米うさくらんて 又州

住吉奉納

夜神糸や鼻息白一面の内 其角  
節季候よ又うむしきしれ 伊賀 須琢  
あやうらやまきし 同 祐甫

乙卯 新宅うて

くゝ家さうとせと興年忘 芭蕉  
弱法師と家門ゆるせ餅のれ 其角



歳の夜や曾祖文をゆげふ多枕 長和  
 うす望れ一室のあやうの音 去来  
 ろきてけき娘まうけや伊勢の 同  
 大とーやまけき娘まうけとー 羽紅  
 やらとねー又やまけき娘の層 其角  
 い孫のくまうけき娘の層 路通  
 多のくま破き襦袢幾とー 松風

猿蓑集卷之二

夏

有明の面みこすやけき娘 其角  
 まふすこき娘まうけき娘 其角  
 おもて様よきけき娘まうけき娘 芭蕉  
 時きけき娘まうけき娘 尚白  
 けき娘まうけき娘 凡兆  
 しきけき娘まうけき娘 智月



蜀魂なくやあつた角櫓 史邦

入おれしきの中やいさ 羽紅

いさよに勝つわあつたれ 丈艸

ふたも代官殿やいさ 去来

こいねを我唄てあげるといふ 遊女 奥刃

ねろ一見の所もあつたや  
病の毛衣とあつたれ

去鴻や、霧よ身をくれけとて 曾良

うもあつたはらうかやせよかんこも 芭蕉

旅館庭でさうく  
庭草をさへす

あつたあつたはらうかやせよかんこも 膳所 曲水

四月八日詣慈母墓

あつたあつたはらうかやせよかんこも 其角

あつたあつたはらうかやせよかんこも 全峯

別僧

あつたあつたはらうかやせよかんこも 越人

あつたあつたはらうかやせよかんこも 珠碩



翁は依られてすまふ

亡人

似合しきけのこまの里 杜國

あふさきうけのま 嵐蘭

井れすゑはく清く 杜の 半残

起ぬくやまきりぬ

朝の岡乃

起くのこまの里 仙化

題去来之塔峨洛柿舎

巨極の如く木魚屋を名に 凡兆

破垣やうゝ麻子れがし道 曾良

南都旅店

誰のこまの里 千那

洗濯やまのこまの里 尾張 薄定

豊國より

竹の子れかをけり 凡兆

多けれ子や白濁く 去来

たけのこや稚き時の孫は 芭蕉



猪ノ吹入さうさうしれ 正秀

明石夜泊

蛸臺やしるれも夢城を月 芭蕉

君が代や鶴唐奈を鍋一ツ 越人

五月三日  
しるれも夢城を月

石の音と並くしける高瀬や 其角

粽結ふかきふくまむ額髪 芭蕉

隈篠の廣きふくまむ餅粽 岩翁

さひきに客人やまふりけ 尚白

五月六日大坂より死の  
遠居を吊ひて

大坂やふれぬ夏乃ふ十夜 蝉吟

奥品を館より

其草や兵九くゆかん乃跡 芭蕉

這出よあいに下れ蟻の新 同

け境をいひしるるなりしとて  
こころもしる

かこつり角かりしけは流るる石 同



五月あゝ家より待つあゝ  
元兆

いねまじ味なまゝやわりの  
木節

るとの謂はありさつと雨  
史邦

奥羽名取の郡より中野まで  
の塚はいつくやと存じし  
道より一里さうりたり乃方  
笠落しつゝまゝとて  
わつとまゝとて五里いゝ  
たうとて

笠落やいつとみればわつり道  
芭蕉

大和紀伊のさういふとて  
て往來の形を

すめりも六料  
紙のうに書つけ

つゝりもいゝあゝ坂やみ  
去来

髪剃や一夜に今情を  
元兆

目の道や葵のくさ月あゝ  
芭蕉

種地や若もせゝと  
羽紅

七十余の老醫今より  
やまゝとてな  
にいふの句をいふれを  
いふとていふとていふとて  
る人よあゝさうとていふとて  
やまゝとていふとていふとて



けしき年よさうとてとさか  
ゆきさうりきさう

六尺の力や五月あえ 其角

百姓も妻と取つて茶摘可 去来

志々そや茶山よけまぬれ 正秀

つみ合ふんけけや妻島 游力

孫と愛して

妻を家へ家へやらん雨蛙 智月

妻を家へ家へやらん雨蛙 花紅

あつ川の関をて

月夜のうや奥け田捕り 芭蕉

出羽のうやとあそび

眉掃を面影して紅粉のふ 同

法隆寺南帳  
南無佛のたきを拜す

長袴けしきさうりきさう 千那

田の畝けしきさうりきさう 万手

膳所曲水之樓を

臥



螢火や吹とくはきくし鳴のやと 去来

秋田乃螢ふん二句

闇の夜や子を泣かす螢の 凡牝  
けしきや船頭酔てはつれ 芭蕉

之熊野へ訪ふ時

長崎

螢火やこゝろくも八鬼尾谷 田上尼  
あけらるゝ物とてあまぬ 尚白  
草むしや百合の中こゝろの魚 半残

病後

うつりやわらふつゝ百合のふ 何処  
すけやあけらるゝ百合の花 乙羽

大坂

蟻蚊群を伴ふ

子やなん其子の母を蚊の喰ふ 嵐園

饑別

ちとせや蚊屋もくさぬ旅の宿 膳所 里東  
くさくさ人よつれ  
糸雲するは春よこれむけ



（一）夜を告ぐ冠者よ名残哉 其角

障風や蚕の生くは耳乃穴 文州

（二）下等や地味なるは蟬の音 嵐雪

客よりや指をひゆる蝉の音 膳所 探志

秋のぬきりまゐるは野の音 芭蕉

表さや音麻刈さあめは 俣市

（三）渚りぬく藤の花のうら流哉 凡兆

舟引の妻は唱声の合散の花 千那

白雨や鐘よりつゞき日れ夕 史邦

素堂之蓮池邊

白るや蓮一枝の揺るゝま 嵐蘭

目焼田や時つゞき鳴く蛙 乙羽

日乃若き鹽の底に蟻<sup>ソシカ</sup>くれ 凡兆

水を月も鼻つゞきゝ殺き金 同

（四）日の曇やこゝろ暑きと牛け台 正秀

きりぎりすのうら坂の原 木節



志んを較ゆはうあし

野臺

うろよろろつゝ

羽紅

青草入

江戸  
巴山

千子、あまうりくをよ  
もしくさつ國のちま  
り、そへしき

傳

子之小袖を今や着用す

芭蕉

水月朝日

嵐蘭

出 孫 康 中 乙 卯

宗次

丁巳年秋學以爲存心也

九  
飛

辰之墨つゝ哭みしを

千那

日餘也。凡乃。容。純。爲。耘。

曹良

夕々や山並いふさき

去來

清子

やみの今のまじ  
度ふゆる

大坂之道



猿蓑集卷之三

妹

梅風や運なち〜と花一

不知  
讀人

此句東武よりききし

素堂

かひくちのけし歯や秋の風 秋風

芭蕉屋より何よおれや雄の風 路通

人よ似〜猿のまゝと細かなる也 珍碩



加賀乃全昌寺に宿す

終夜枯のきくやまのこ 曾良

芦原や鷺の寝ぬおをねの風 山門

あまのや鬱金留れ枯のの 九北

く川露や猪の臥芝の起あらし 去来

大比叡やうぬおの葉のてぬき 野童

と葉らりて跡ふかれぬや和の露 九北

文月や六日もなきの夜ふ似す 芭蕉

合歡のよれなうゝいふ早あけ 同

七夕やあまのうゝいふるぬへ 杜若

こやこやのほろりやうゝ相撲取 去来

朝のうゝ寝る眼のちりし 風姿

あまのこの夢にほろりす 及肩

あまの泣くをよまは木槿の 嵐蘭

まな無きやうゝるし木槿の 秋風

うたえたるやうゝねられ 千那



嶽

しるのねほあるきや嶽雨 史邦

そよや藪のゆより卯あし 旦葉

枯月やよのほろくくす 子尹

迷ひみの親めくろやすき東 羽紅

ハ瀬おりにあひして葉  
くろの文ちけり序あは

まきく楊乃せんけ落し 凡兆

アーくろくろくくく  
ふくろくおせにふて

あふふふふふふふふ 去来

招

草刈くろけろ思ろく秋の小路 李由

平田

え禄ニ平翁は伏せき  
こころくろくろく三越後より  
り軒くろくくかの國く  
くろくくろくくくくくく  
くろくくくく

いつくろくくろくく秋の東 曾良

桐のまにくろくく堀の角 色蕉

百舌鳥あくや入るくく女松 凡兆

初唐より然るれまろくく 落梧

亡人



望田より

病属れ後さむいあて病は 色蕉

海との船を小海老まのい 同

加賀の小きくちや又多田乃  
神社の宝物とくく宝  
くさくさ草乃くくく  
錦のきれききききき  
くまのあきりきききき

いんや甲のふききくす 芭蕉

采島や二多ふ甲の虫きき 尚白

くくあやきききききき 風姿

いんやきききききき

葉月やきききききき 千人

こく月にきききききき 之道

葉釋と月をききききき 半残

月えせん休見のききき 去来

公羽をきききききき 伊賀

くくくく松ききききき 土井方

部



加茂よ詣きては涙の如き

おのゝとの

ちるゝやうれおぼや

なつゝゝゝゝゝゝゝ

月歌や拍子もろく膝の上 史邦

友近の六條はあゝうりつゝ  
そゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

伊賀

影やーたゝゝゝ朝月夜 卓袋

いゝ成ゆやあゝーい月の歌 乙羽

京筑紫をすれ月く宿中る 丈艸

明の相もやゝ月一 元兆

ぬりゝゝゝゝゝゝゝ月つゝ 尚白

向の能くちゝ月ゝゝゝゝ 曾良

え禄二年つゝゝゝゝゝ  
月をゝゝゝゝゝゝゝゝ  
月をゝゝゝゝゝゝゝゝ

月清ゝおひのゝゝゝゝ乃と 芭蕉

仲雄の望猶子を遠き寄

うゝゝゝ夜の月もあゝゝゝゝゝ 去来

膳所

明月やあゝゝゝ茶はあゝゝ 昌房



鐺

月<sup>○</sup>るる人の破<sup>○</sup>さう  
僧<sup>○</sup>正のいよの小屋れをぬし  
和<sup>○</sup>漸や鳴つづの浪の飛<sup>○</sup>ゆ  
一<sup>○</sup>戸や衣もやうこもしく  
稗<sup>○</sup>の種<sup>○</sup>つる迹——さうさ  
徒<sup>○</sup>糟やかきよの食<sup>○</sup>す荒<sup>○</sup>留  
あ<sup>○</sup>やもうてきうせいの鐺<sup>○</sup>外  
羽紅  
尚白  
凡兆  
去来  
越人  
正秀  
嵐蘭

一鳥不鳴山更幽

物の音<sup>○</sup>らりたつ——葉<sup>○</sup>山<sup>○</sup>あ  
し——き拍<sup>○</sup>あのみ——里<sup>○</sup>あ  
旅<sup>○</sup>枕<sup>○</sup>屏<sup>○</sup>のつとを軒<sup>○</sup>下  
鳩<sup>○</sup>々<sup>○</sup>や流<sup>○</sup>柿<sup>○</sup>あ<sup>○</sup>の蕎<sup>○</sup>麦<sup>○</sup>島  
と<sup>○</sup>ち<sup>○</sup>や<sup>○</sup>下<sup>○</sup>さ<sup>○</sup>や<sup>○</sup>残<sup>○</sup>の<sup>○</sup>人  
鐺<sup>○</sup>釣<sup>○</sup>は<sup>○</sup>も<sup>○</sup>し——種<sup>○</sup>つ<sup>○</sup>り  
わ<sup>○</sup>あ<sup>○</sup>向<sup>○</sup>の<sup>○</sup>う<sup>○</sup>す<sup>○</sup>過<sup>○</sup>り<sup>○</sup>さ<sup>○</sup>う<sup>○</sup>蕎<sup>○</sup>麦<sup>○</sup>  
茶<sup>○</sup>あ<sup>○</sup>を<sup>○</sup>切<sup>○</sup>る<sup>○</sup>跡<sup>○</sup>ま<sup>○</sup>う<sup>○</sup>さ<sup>○</sup>な<sup>○</sup>り  
凡兆  
曾良  
戸<sup>○</sup>里  
珍碩  
凡兆  
半残  
尚白  
其角



うきもて鴉カの鳴きやきりしれ 珠碩

このころのやももも 杉原秋 土芳

稲うく母よ出逢ぬうきり 凡北

自題落柿舎

移めや竹まきちきあどし 去来

志し原やけつて橋のしれき 塵生

肌をし竹切のうきすゑ桑 凡北

神田ふ

これいふしうしれの物もねあひの

神田ふの報うの音 整足

物よとくあひま ありしや

花すも大なるをまうり 嵐雪

し秋の四五日弱きすきか 文州

立きし秋のうやけり 凡北

世の中、鶴鶴の屋乃し 同

冷奥け齒よとくしやけの音 荷分



猿蓑集卷之四

春

梅咲て人か怒る悔もあり 露沾

上臈の山莊よりうくる

候しちりり

梅より山路隔へたやうの 去来

しる香やふ入異半の角 句空

庭奥

梅より砂利も流す谷は奥 土芳







よき〜まゝにて候けり  
もまゝの風情を意とすや

夢さめて又一句のやむほの梅 嵐蘭  
百八のひてまゝや園のしめ 其角  
ひら寝の能宿る〜ん初子日 去来  
野畠や房越のひく摘み果 史邦  
くつやちよ満まるる葉に 嵐蘭  
青月夜ふらりやめとて 如行

憶翁之客中

敬

裾ひて草をうつ〜ん草枕 嵐雪  
つ〜ろ踏むかき〜るあ 路通  
七種や跡〜ろ〜朝〜ろ〜 其角  
家や〜る〜の〜根芽 丈艸  
うす〜ろ〜ろ〜ろ〜ろ 其角  
豚〜ろ〜ろ〜ろ〜ろ 同  
鈴〜ろ〜ろ〜ろ〜ろ 去来  
鶯のち踏みす〜ろ〜ろ 一桐  
伊賀



雪やしらぬ一みれきりふ 江戸 溪石

うらやをを詠めしれ 其角

鶯や下駄の齒よく小田代上 凡兆

雪や窓よりちをよす 伊賀 魚目

やめの雪を柳よりいす 江戸 探丸

けしきいさみの持へき柳 江戸 ト宅

垣よりいへしれ 江戸 柳 遠水

よこ川極まれ 江戸 柳 尚白

青柳のきりれや鯉の住所 伊賀 一嘆

るけや鈴いす 同 場乃 本白

待中乃 揚水

回や 江戸

妻や 江戸 橋の妻 芭蕉

うや 江戸 切崎 越人

うき 江戸 移 去来

露沾 江戸 餘寒の當座



其のよめふさしめ羽織ハネオリ 龜翁カメオウ  
 おのあねちりしめ毛モ 尚白シヤウハク  
 出りし極キョクよめふさしめふし 龜翁カメオウ  
 せきやゆきしめ物あし 風雪フウセツ  
 宵紫ヨシのあねちりしめふさしめ 凡マン此コ  
 白鳥ハクニや海苔ノリハ下ゲ部ブのふし合アヒせ 其角キカク  
 人のふさしめふさしめ極キョク海苔ノリ 松峯マツミネ  
 まさふさしめふさしめふさしめ 元志ゲンシ

陽炎ヨウエンや取トルしめふさしめ上ウヘ 荷カ分ブン  
 けしめふさしめふさしめふさしめ 百歳ヒャクサイ  
 うりしめふさしめふさしめ岸キのふ 土ツチ方カタ  
 ふしめふさしめふさしめふさしめ 氷ヒョウ同ドウ  
 野ノふさしめふさしめふさしめ 凡マン此コ  
 ふしめふさしめふさしめふさしめ 色イロ蕉セウ  
 いしめふさしめふさしめふさしめ 伊賀イガ配ヘ力リキ  
 狗脊コシの塵チリふさしめふさしめ 嵐雪ランセツ



彼岸よりとむる一夜二おや 路通

ふりや常けあらうて涅槃像 野水

花並ぬ裏ハ燕乃かゝい道 九兆

えさう今や紀のうへに又の居 伊賀 沢雉

春ぬや屏風のふ草よ花咲ぬ 嵐虎

ふりよおし

ときぬやうりやうきう法門 猿雛

不性と金かき起るれきぬぬ 芭蕉

紙

春ぬや田舎のふれ雛責 史邦

いゝゝゝのあゝや軒まゝ花 羽紅

泥垂や田舎水の畦つゝん 史邦

蜂こもるまゝ露のけや虫の囊 昌房

振袖や下座よりよきき年々雛 去来

まふふいふれ雛のぢぢぢのふ 伊賀 萩子

桃柳くらりありとやまんあれ子 羽紅

ふれま境ふりゝぬゝゝ 三河 鳥巢



贈

十ホ  
サ  
心  
サ  
カ  
ノ  
全  
道

里人の贈るる田螺れ 嵐推

螺のまゝ一と夜寝よるる夢の 半残

帝鳥切て白根の霧をの束の 桃妖

いのほりこもすもや潦 園風

目の影やこもれよの翹すの 珎碩

花露ぬむ束のすもや縁の光 土芳

閑の他や果なるうつてあけ 芭蕉

越より飛来入りてとて露の  
つゝのちやもきこもるく道

樟

鴉は巢の樟の枯枝よ目にぬ 允兆

うすくうらんこもるすもや 石に

子や移ん餘りききたのきあや 秋風

いゝらあけ中れ拍子や雉あや 芭蕉

芭蕉庵のふもをを訪

蓮草小鋸はくあやれ 曲水

木所筋旅してあやけ拍あや 山店

山店



焼

畫韻

山吹や夕後の焙炉は白く時

芭蕉

白玉はあまたつく様くれ

車来

わさびの葉はくさくさ  
あつたれは髪けつらんもめ  
しつとけさ

竹もくくを昔やちり様

羽紅

鰯半おしよ下まつり

津國山本  
坂上氏

うしろの釜やうくも様

芭蕉

うしろの釜やうくも様

伊賀  
利男

東蔵ふあうぬ

小坊主やふあうぬ

其角

一枝はゆめはうくも様

尚白

雞の卵はゆめはうくも様

凡兆

まきんようくもはうくも様

丈艸

馬喰のうくもはうくも様

史邦

おろしやうくもはうくも様

千那



島城のふもをさるる

〇 ねるや ちよ ぬり 神の顔 色蕉

いりの国を城のふもをさるる  
あふれ乃ハ空橋代新ニ附  
らきさるると云傳へんを  
我し

〇 一里ハこれ 花亭のふもをさるる 同

云々の墓を武谷中にも  
と歳してふれ元年のふも  
城よりふもを墓のふもを  
ねるや ちよ ぬり 神の顔  
らきさるると云傳へんを  
我し

まうや ちよ ぬり 神の顔 園風

知人よ ちよ ぬり 神の顔 去来

〇 あふ 僧の顔 ちよ ぬり 神の顔 凡北

浪人のやうに

〇 嵐を ちよ ぬり 神の顔 半残

伊賀 長眉

ふもを奥のふもを  
らきさるると云傳へんを  
我し

〇 大寺や ちよ ぬり 神の顔 曾良



道灌山よのけ

る澄やあさりのひをひく 嵐蘭

ほけのひをひく

標子に夜ちるあけさす 羽紅

庚午の歳家を焼く

加筋

矮よりちる花はらち 北枝

しりしや伽藍の樞や 凡兆

江戸

海棠はしる満ちる夜の月 普船

大和の脚

草即ちちるはやあのみ 芭蕉

しりや躑躅ふけは屋のひ 探丸

やうー海よりちるや夕日 智月

兎角しておちるひは 山川

伊賀

鷗鳥のひよりちるは 式之

木曾塚

其まのひよりちるは 乙羽



春風吹くふれお殿の堂々然 曾良

望湖水惜春

けふもわさびのふゆふゆふゆふ 芭蕉

猿蓑集卷之五

去来

鳥の羽を刷ぬふーと我 カキツクニ

一ゆふ月夜ふのふふふふ 芭蕉

股引の朝ふぬふふふ 允兆

たぬふふふふふふ條張のふ 史邦

まふふふふふふふふ月 蕉

人ふふふふふ物乃梨 来



来蕉邦兆蕉来兆邦

蕉来邦兆来蕉兆邦



疲骨れすゝ起る力なき  
隣をうりて車にこむ  
うき人を枳殻垣よりぞん  
いすや別の刀より出す  
せうけふ掃てうらをうら  
ゆきい切るをうらふ  
青天は有明月の影をけ  
湖水の秋乃比良れうを

邦 兆 来 蕉 邦 兆 来 蕉

秋

紫あや蕎麦めすまれ歌を  
ぬのそ若智ぬ月影を  
押合て寝て又うつり  
うられを乃まゝ赤き  
一掃歌つゝる意の  
枇杷のちをよにまき

邦 兆 来 蕉 邦 兆 来 蕉

去来九



芭蕉 九  
凡兆 九  
史邦 九

凡兆

市中ハ物のほらや五世月  
あひしくとく乃新 芭蕉  
二番草一取の果は種は去来  
灰くくくくくあ一板 兆  
けし銀の刃きくす不自由は 蕉  
たききくくく長き根指 来



後

草村は蛙こはるのうき道  
路乃ききとちにはけいす  
道心のわらわあれたるむ時  
能やれ七尾の冬はけいす  
魚の骨志うる道の老をそ  
待人へへ小川の鑑  
まより屋敷を倒す女を  
湯屋の竹の葉子候し

蕉 兆 来 蕉 兆 来 蕉 兆 来 蕉 兆

苗香はまを吸着する風  
俗やとしくきりくきり  
さる川の橋をせきする様は  
年々一年の地子いふや  
五六七とよつての家儲ミツタリ  
足袋のしきり黒はるる  
追うて早ふはる乃刀持  
るらるる何れ水はけり

蕉 兆 来 蕉 兆 来 蕉 兆 来 蕉 兆



戸障子もひらひらの賣物  
えんきやうきやうき  
ころも草鞋を飾る月夜  
蚤ふきふきと起し初秋  
うめうめころも飾る林蔭  
ゆふや蓋のあつた巾着  
草履は新目くはてるおや  
いのち嬉しき撰集れ

蕉 来 兆 蕉 来 兆 蕉 来 蕉

さよふ品うらゐるおや  
は母の果て皆小町ちり  
あにあり粥すゝも海  
はるるまゝちりる屋敷極愛  
ふれい風遠くすゝあけ  
おゝうゝあゝおのねし

兆 蕉 来 兆 蕉 来



芭蕉 十二

去来 十二

凡兆

灰汁桶のきやきやきや

あけのけしきやきやきや 秋 芭蕉

新雪あけのけしきやきや 野水

あけのけしきやきやきや 去来

あけのけしきやきやきや 蕉

あけのけしきやきやきや 兆







すまはしき女れぢゑもくも  
何れゆいそゝ糧乃ち  
夕月、夜曇の宮、  
人もちやれあそふ水  
うそつゝに自慢いそく  
又もろく此部を  
糧乃ち田の青やそ  
加へた乃ちやそく

来水 蕉兆 来水 蕉兆 来水 蕉兆

抱うりた尻をさく  
雨のやうりた  
昼孫より  
とらうく水は  
糸繰、  
其れそ三月

来水 蕉兆 来水 蕉兆 来水 蕉兆



芭蕉 九  
野水 九  
去来 九

餞乙卯東武行 芭蕉

梅の葉まわりをけあるけ  
かさあすりそきりの暖る 乙卯  
云々存あゝ中よ土持はるや 珍碩  
志も移してふれよふ 素男  
乃隅よ虫齒うえてる月 刃  
二階の窓をさねるあき 蕉



放やううつれ跡はんものす

男

編の糸延乃力ちきうせ

碩

ちうしんれ初まにける終幕と

蕉

内務頭と叫あうはれ

品

卯の刻乃箕まに並ぬやめ方

碩

すこきるねの志のあらり

男

秋のれしうのれはうとて

品

若うしうる百舌鳥の一勢

智月

懐よるまふあやむしう雄の月

凡兆

けさうさうぬあのかつら

品

鏡の柄よるすうらうるまのれ

去来

灰すきちうすおしあ跡

兆

名  
まが目よはききてくる孫机

正秀

店屋ゆうし休のまうり

来

汗ぬくみ端のきうの浦の糸

半残

うられせうき雛乃下

土芳



大膽よゆきしつゝおぼえ  
 身われ紙の取所なき  
 小刀乃鈴又なる細工  
 棚よ火とりす大年の夜  
 うそとわすれし後の  
 むのし合せたるかきぬ  
 此方よりぬきし破扇  
 碧油移させし月見  
 残 芳 園 風 猿 雖 風 残 雖

咳の隣いらも縁つし  
 海へいりしはるる顔  
 形なき子をおひる金魚  
 うすきある糸の割下  
 花よりこころけつる水  
 雛の被るはるる  
 芳 風 嵐 蘭 史 邦 野 水 羽 紅

芭蕉 三



乙卯	五	土芳	三
玆碩	三	園風	三
素男	三	猿雖	二
智月	一	嵐蘭	一
凡兆	二	史邦	一
去來	二	野水	一
正秀	一	羽紅	一
半殘	四		

猿蓑集卷之六

幻住菴記

芭蕉州

石山乃奥岩間のうろよふを  
 国分山と云ふれど國分寺の所を  
 傳ふとてへ一禁扉は細く流を渡  
 るて翠巖に及ぶ中三曲二百歩  
 には八幡宮ありたふし神傳  
 ハ跡隠れし像とて唯一の家あり



甚忌むる事をと两部光成和の  
利益乃塵を同一うたまたま  
又貴一日比る人の詣さうたれハ  
いと神さし物さうたれ傍に位  
捨一草の戸さうたれ根を軒  
とさうたれさうたれ狸  
姉とさうたれさうたれ  
の僧さうたれハ勇士菅沼氏曲水子と

伯父とあんまりと今ハ年子  
むと内とふと幻住と人の名と  
のと張とり予又市仲とさうたれ  
ナ年子とさうたれさうたれ  
ふと義忠のふとさうたれ  
家と離て奥羽と家と信の奥とさうたれ  
ア一面とさうたれさうたれ  
ふと北海の荒磯とさうたれ



破りてと歳湖水の波は漂信の  
浮巢の流らもくくさるれ一  
乃陰多のそく軒端落あふ  
え垣は流はあもくく月れ  
初いこくくあへくくあやう出  
しとくくあもくくあもくく  
のあもくくあもくくあもくく  
山あもくくあもくくあもくく

狂宿うくあもくくあもくく  
のあもくくあもくくあもくく  
くくくくくくくくくくく  
南くくくくくくくくくくく  
くくくくくくくくくくく  
北風海を渡くくくくくく  
くくくくくくくくくくく  
くくくくくくくくくくく  
くくくくくくくくくくく  
くくくくくくくくくくく



木樵のひり舞の山田は早苗とる  
奇雲花ふく雪れさよ水鶏は  
お音義景地とくめくく  
わし申の三上山はさき供は  
わして武蔵ゆき古き抱ゆふ  
いへと田上山は古人をうぬとや  
う山嶽千ふくき袴腰こいふ山黒  
津の里いふくはうありて網代

よりとくふくき集の海あり  
より眺るふくきおとけ乃  
客よ遠のほり松の棚作葉の国を  
とぬき様の腰掛と名付彼酒堂  
よ葉といふふ主は客よは葉を  
結る王公羽除任り徒ふあし唯睡  
辟山民とぬき扇顔よ是をいふけ  
ゆき空山よ風をぬきて座す

厚好



く心すえある時さ谷の清水を  
汲み自ら炊くくのもち成備く  
一炊の備いくくくく昔信さんか  
けよんくく信あけりてくくく  
る物くくくく持佛一間と隔て夜  
の物きくくくくくくくくく  
つりさふまを籠坐するくくくの信く  
かきくの甲斐にくくく殿子くくく

洛よのほり、くくくくくくく  
くく額とくくくくくくく  
海くく信菴のくくくくくくく  
草菴の記念くくくくくくく  
くく旅の後とくくくくくくく  
くく木をれ梅を並越の安養く  
枕のくくくくくくくくく  
ぬくくくくくくくくくくく



里の竹のこたへもつていのち乃稻  
くいまー鬼の豆畑よりあや  
家ゆらぬ農談目既よ山の端よ  
うきさ夜屋歸よ月を待つてい  
新を付し蛇を取て園兩よ是蛇  
もさすいーいーいーぬよ  
深寂をぬく野よ跡をかくて舞  
とふあひや病み人よ供てを

# 借

をいし人よ似る借年月れ  
移し独り身れ移をまもつ  
あゝ海は官舎命れ地をさ  
やーい佛離祖室の扉よ入  
ら舞とせーもあつたす月を  
よあふてあ花鳥も情を芳く  
暫く生涯のちわ事とせあれ  
終るす能き月うーてげ一筋よつ



る樂天ハ五臓ニ神をとり老朽ハ  
瘦より賢愚文質のいゝいゝ  
いゝいゝいゝいゝの極をいゝや  
いゝいゝいゝいゝいゝ

せんぬのし推れぬものゝるゝゝゝ

題芭蕉翁國分山

幻住庵記之後

何世無隱士以心隱為賢  
也何處無山川風景因入  
義也間讀芭蕉翁幻住庵  
記乃識其賢且知山川得  
其人而益義矣可謂人與  
山川共相得焉廼作鄙章  
一篇歌之曰

琴湖南分國分嶺



古松鬱兮綠陰清  
 茅屋竹牀總數間  
 內有佳人獨養生  
 滿口錦繡輝山川  
 風景依稀入誹城  
 此地自古富勝覽  
 今日因君尚益榮

元禄庚午仲殊日

震軒具州

日人云向井玄端云来兄

儿右日記

時多背巾入てやる林廬の  
 曲水  
 といふた跡たつやまの  
 野水  
 鶏もろく鳴る鶏もろく  
 去来  
 海へ五月雨うぬやう  
 凡北  
 軒らうも名梨やれ枝の  
 千那  
 細腰やうもやうの  
 珍碩

贈紙帳



おもゆる紙地よりさうり

野徑

いしききと露の露よりさうり

里東

雲飛鳥よりさうり

乙羽

顔や降乃中れ花うり

怒誰

多やう一字よりさうり

探志

五羽六羽菴よりさうり

元志

まつりたうりさうり

泥土

笠あより櫃よりさうり

史邦

月坊や海より鹿園よりさうり

正秀

志つらさい雲の雲沈むは

柳陰

涼さうりさうり

如行

訪より留よりさうり

椎のよよりさうり

朴水

目下やうり洗ぬ程よりさうり

市隠

文よりさうり

後所来や早苗よりさうり

半残



麦乃粉をふき度す

一袋れこれや鳥お田のこころ麦 之道

書音

吉未、サレ、長崎

一箕入るふらや娘のふら 魯町

夕立や梅木の奥れ一志より 及肩

罪依腰掛

梅ゆや田と山はるるより 尚白

贈簞

志るあのもるあふみのしゑ 北枝

木履ぬく侍よりより薔花ふ 木節

包紙に書

膳所

経よりすき袋や萩の露 扇

稻のふくれを佛は土唐土 智月

石ふやけく果下り輝の月 羽紅

桶の端をふれて鳴をむさく 昌房

里はくくろくともふあつと 何処



啼やいゝ境はほろりゝゝゝ越人

越人といゝゝ訪合

筆のふれ信ふ飛入菴のれ等哉

明年弥生尋旧菴

春のふやあゝの星のふれゝゝ嵐蘭

同其

涼ふり居をふ人住けゝ曾良

韻

跋

猿蓑者芭蕉翁滑稽之首韻也

非比<sup>スレニ</sup>彼山寺偷<sup>ニ</sup>衣朝市頂冠笑

只任<sup>スレニ</sup>心感物写興而已矣洛下

逸人凡兆去來隨翁遊學棋館

竹窓躡等凌節斯有歲屬撰<sup>ニ</sup>此

集玩弄無已自謂絶超<sup>スレ</sup>孤旅白

裘者也於是四方吟友憧々往

躡

裘



管 蘊 倪 域 搜

來或千里寄書々中皆有佳句  
日蘊月隆各程文章然有昆仲  
騷士不集錄者索居竄栖為難  
通信且有旄倪婦人不琢磨者  
廉言細語為喜同志雖無至其  
域何棄其人乎哉果分四序作  
六卷故不遑廣搜他家文林也  
維貳元祿四稔辛未仲夏余掛

搗 袖

錫於洛陽旅亭偶會兆來吟席  
見需記此吏題昏尾卒援毫不  
揣拙庶幾一藁高張有補于詞  
海漢人云

風狂野袖

丈艸漢書

正竹書之



